(4)民間保育施設の現状と問題点と今後の展望～カトリック保育施設連合会の調査から

春見静子

1996 年 1 月 1 日現在、ドイツ・カリタス連合体の管轄下にある保育施設の聡数は 10493 施設で、その定員は 708,088 人となっている。これは社会福祉の民間 6 団体の中で最も大きい数字である。これらの保育施設はカトリック保育施設協会に属しており、この協会は、施設間の連絡調整や職員の研修を行い、カトリック保育施設全体の啓蒙と向上のために指導的な役割を果たしている。

ドイツにおいても、少子化の波は押し寄せており、保育施設に対する社会の要請はますます大きく多様になり、新しい緊急な課題が差し迫っている。そのために保育施設の改革と変貌が求められることになるのであるが、民間の保育施設は公的な施設よりその歴史が長いので、とかくその伝統に頼りがちである。特にフレーベルやモンテッソーリ教育法などの質の高い保育内容が評価されて住民からの信頼もあつい。良い伝統は守られるべきであるが、現代の社会の中で保育所の果たすべき役割は確実に変わってきている。伝統は時として変革を阻むことにもなりうる。

そのためにカトリック保育協会は 1994 年から 1996 年までの 2 年間を保育施設の変革の道筋を探るための調査期間として、ドイツの全地域に亘って 11 のカトリック保育施設を対象施設に選び、施設設置者、職員、両親の協力のもとに、現在の問題点の分析を行い、それに基づいて変革のための計画を策定し、それを実行して、それについての評価を親と職員と設置者から求めるというようなプロジェクトを行った。以下その調査から明らかになったことと、そこに見られるドイツの保育施設の将来像を探ってみる。

1. 調査の前提

この研究プロジェクトはベルリン自由大学とカトリックベルリン社会福祉大学の専門家の協力を得て、ドイツ・カリタス連合体の支援の下に、カトリック保育施設協会が行った。対象施設の選択に当たっては、この計画の趣旨を各司教区を通して全国の保育所に送り対象施設を募集したところ 22 施設が応募し、その中から委員会が 11 施設を適当と認めて決定した。11 施設のうち 7 施設は旧西ドイツの州にあり、4 施設は旧東ドイツの州にあった。個々の具体的な改革はそれぞれの保育施設が全職員参加の下に現時点の活動に照らして検討し、すぐに実現できるものは実行し、また長期な計画で行うべきものについてもできるだけ具体的に考えることとした。委員会は保育施設を取り巻く社会の状況を次のように分析している。

1.多くの親は家庭と職業の両立を望んでいる。
2.教育の責任を一人の親が引き受けなければならない子ども達が全体の約 3 分の 1 を占めている。
3.子どもの数の減少により、兄弟や近隣の子どもとの交流の機会が少なくなった。
4.子ども達の遊び場が少なくなっている。
5.問題行動や言語障害のある児童や集中力の乏しい児童が増えている。
6.現代のメデイアが子どもに大きい影響を与えている。
7.親は障害児との一緒の教育を望むようになっている。
8.親は家庭では十分にできない宗教教育を保育所に期待する。
9.税金からの収入（とくに教会税）の減少により、保育施設の財源が苦しくなっている。

このような状況から保育施設の変革の基本方針として委員会は次のような 5 点を打ち出した。

1.あらゆる生活状況にある親と子どもを支援する施設になること。＜保育形態の見直し＞
2.子どもに新しい生活経験の場を提供すること。＜保育内容の見直し＞
3.保育所が地域の人々の真のパートナーとなること
4.高齢者と年少者が共に学びあい、世代間の連帯を強めること
5.地域のネットワークの一部となり、そのネットワークに貢献すること

以下に、これらの項目毎に、11 の施設の状況と改革のための取り組みをみていく。

2　保育形態の見直し

ここでの重点は保育時間の延長と、保育年齢を 3 歳以下と 6 歳以上に広げることと、通常でない児童と家庭の状況にも対応できるような家庭支援のあり方を考えることである。

保育所の取り組みの例

保育施設 1　　ニーダーザクセン州（旧西ドイツ）

ウクライナ、ポーランド、トルコからの移民が多い地域。住民の 75 パーセントが社会扶助（生活保護）の受給者。アルコールや薬物や暴力や失業などの多くの社会問題を抱えている。この保育施設では毎昼 100 － 150 の給食をホームレスやその他の必要な人に提供している。保育施設の定員は 74 名であり、3 歳から 12 歳までの児童が通所している。通常の保育時間は月ー金の 7 時 30 分ー 16 時 30 分であった。

2 年間のプロジェクト期間中に職員や親は調査のスタッフを交えて何度も話し合いの機会を持つことにより、親と職員の両者の関係が緊密なものになった。職員は家庭や児童のニーズにより敏感になり、親は積極的に保育所の活動に参加したり発言するようになった。母親達は保育施設を使って自発的な会合を持つようになった。親からの要望として出されたのは、保育時間の延長であり、18 時までの保育と、土曜保育の希望であった。

保育施設 2　ブランデンブルグ州（旧東ドイツ）

ブランデンブルグ市内の新興地区にある。児童は保育所の近所に住む主として労働者階層が大半を占める。45 人定員で 2 歳ー 9 歳までの児童が通っている。東西の統合以後ブランデンブルグでは自治体立の保育所、特に 3 歳未満児の保育所が次々に閉鎖された。しかし、3 歳未満児の保育所と学童の保育所への親の要望は大きい。親の要望に応じるために、この施設ではプロジェクトの重点は保育形態の変更に置いた。

1994 年夏に建物の全面改築を行い、3 歳未満と 6 歳以上の児童を積極的に受け入れるようにした。親の要望は 3 歳未満から学童までの一貫した社会教育的な保育であった。そこで、それまで年少児が主として利用していた一階部分を増築して、3 歳未満から学童までが縦割りグループで一緒に過ごせるような設計にした。しかし混合クラスの保育のあり方については議論を呼んだ。専門書を読んだり活発な意見の交換がなされた。旧東ドイツでは保育は原則として年齢別のグループで行われてきた。それに対し西ドイツではて 3 － 6 歳の混合クラスが多く実践されてきた。しかし、ここでは 1 歳半から学童までの混合クラスということで西側の経験がそのまま通用するわけではなかった。異年齢のグループの特性が生かせる保育の内容を探ることが課題となった。

保育施設 3　　ザクセン州（旧東ドイツ）

人口 3500 人の小さい町で、ドイツの東の突端に位置し、ドイツとポーランドとチェコの国境が交わるところにある。統合以前の主たる産業は繊維であったが、統合により多くの失業者が生み出された。改革前はこの保育

所には 51 人の主として幼稚園年齢（3 ～ 6 歳）の児童が、1 グループ 12 － 15 人ずつの 3 グループに分かれて保育されていた。1992 年、それまで自治体が経営していた学童保育施設（6 ～9 歳）を引き継ぐことになった。両施設は別々の建物で別々に運営されていた。今回のプロジェクトでは幼稚園から学童保育施設に移行する児童がスムーズに移れるようにすることと、両施設が一緒に活動する機会を多くもてるようにすることであった。1995 年の学期初めに、新 1 年生で学童保育所にきょうだいが在籍していない子どもたちのために幼稚園の中に学童グループをつくり学校生活になれるまでの間学校から幼稚園に下校できるようにした。すでに学童保育所にきょうだいがいる 1 年生は隣の学童保育所に移ることもできるようにした。このことをきっかけにして両施設の交流が深まり共同の余暇活動の計画が立てられた。週に一度両施設の全児童が集まって歌ったり、ゲームしたり、楽しい一時をもっている。

保育施設 4　　ザクセンーアンハルト州（旧東ドイツ）

人口 4500 人の小都市。特別な大きい産業がないために、労働者の多くはヘッセン州やザクセン州に働きに出かけている。行政改革の影響で職場が減少し住民の購買力も著しく減少している。幼稚園は統合前から 3 クラスの体制で存在していたが、1994 年、自治体から市立の保育施設を引き受けるように要請され、そのためにがらがらになった市の建物が提供された。その結果、1 歳から 6 歳までの 143 人の児童が 9 のクラスに分かれて保育されることになった。3 歳未満のクラスはかつての公立のもので当時 4 クラスに編成されていた。今回のプロジェクトではとくにこの 3 歳未満児の保育のあり方が検討されることになった。統合の前と後での保育のあり方を比較すると次の通りである

保育所の必要性

以前　かつてはすべての女性がフルタイムで就労していたために、児童はみな 8 － 10 時間の保育が必要であった。

現在　3 年以上休職できない女性にとって、またできるだけ早く職場復帰を果たしたい女性にとっての保育所は必要である。

慣らし保育と家庭との接触

以前　原則として 14 日間を使って段階的に慣らしていく。

現在　親がいつ、どのくらい長く子どもと一緒に幼稚園に来られるかを親に決めてもらう。保育者は助言するだけである。

以前　衛生の観点から親は保育室には入らなかった

現在　子どもが早く馴れるためにも母子のグループをつくり積極的に参加させている。

以前　親と子どもと保母の接触の場所はクラスの入り口であった。

現在　子どもの送り迎えに親が多くの時間をさき、たとえば保育所で子どもと一緒に朝食をとったり、お茶を飲めるようにしている。

クラスの大きさと子どもの年齢

以前　一人の保母は 12 ～ 18 ヶ月の子どもを 6 人、18 ～ 36 ヶ月の子どもを 9 人担当した。

現在　16 ～ 38 ヶ月の子ども 15 人を 1 人の保母と 1 人の補助職員（一日 5 時間雇用）とでみている。

以前　クラスは 2, 3 ヶ月の幅で原則的に同年齢のグループとする。
現在　クラス分けは厳格にせず、子どもの希望を受け入れる。

食事
以前　どの食事も一緒にとった。
現在　昼食のみ一緒にとり、朝食はそれぞれの子どもにあわせる。

以前　朝食も保育所の厨房でつくった。
現在　朝食は原則として家から持ってくる。

遊び
以前　保母の指導のもとの一斉保育
現在　自由保育を多く取り入れる

午睡
以前　午睡の時間が決められていた。
現在　子どもの要求に応じて午睡を取らせる。たとえ午前中でも眠い子どもがいれば 15 分　でも休めるようにそのためのコーナーを用意する。

以前　18 ヶ月未満の児童は一日 2 回の午睡の時間を設けていた。
現在　午後に熟睡させるようにする

3.　保育内容の見直し

保育施設は社会の要請にあった新しい保育内容を考えなければならない。保育施設は生活の場であるとともにさまざまな体験ができる場でもなければならない。

取り組みの例

<u>保育施設 5　メックレンブルクーフォアポンメルン州（旧東ドイツ</u>）

就学前児童が 100 人で 4 クラス、学童が 1 クラスで、2 つの建物が同一敷地内にある。この町には他に保育施設がないので　町と周辺の村からバスでかなりの時間をかけて通園している。この地域の住宅は狭く家の中ではあまり遊ぶことができない。戸外にも子どもの遊び場が少ない。家でテレビをみる時間が長い。児童の多くは 8 時間以上をこの施設で過ごしている。

このプロジェクトでは、施設は真に子どものためのものでなければならないという原則を確認して、施設の全職員と親が保育施設における子どもの権利についての討議を重ねて、25 に及ぶ子どもの権利を列挙した権利宣言を採択した。そしてこの権利を護るような理想的な保育のあり方を提案した。さらにそのような保育を行う上での長所と、考えられる問題点を次のように整理した。

長所	問題点
子どもの自立への欲求の尊重	秩序が保てないことがある
小さなコーナーをつくり、子どもが一人で居られる場所をつくる	親が迎えに来るときに見つけにくい
他のクラスの子どもと自由に遊べるようにする	保育者の目が届かないことがある
朝の集まりは他のクラスに入っても良い	クラスに保育者が一人しか居ないときには混乱が起こる
子どもはどの子どもとも、どの保育者とも接触できる	子どもは落ち着かずに家の中を走り回っていることもある
子どもはクラス担任以外の保育者や給食や用務の職員と接触してその仕事を手伝う	保育者は全員に対して責任がある
	職員の理解を得るには時間が必要
保育所全体に「自分たちの・・・」という意識を育てる	子どもがいろいろな所に散らばっているので全体のためのプログラムを実行することが困難である
責任感を育てる	
すべての児童に対してすべての職員が責任を持つ	教材や教室が不適切な取り扱いにより壊されることが多い

保育施設 6　バイエルン州　　（旧西ドイツ）

第二次世界戦争後、ライン－マインの東の地区で人口がもっともが密集している地域の近くに位置し、軍飛行場に隣接している。

近所には目立った建物はない。保育所に通う児童の多くはかつての軍の施設の従業員であり、大部分が低所得者で高層団地と低家賃アパートに住んでいる。保育所の児童の 20 パーセントが外国籍で 12 パーセントが生活保護受給世帯である。保育所は 50 メートルほど離れた 2 つの建物からなり、それぞれに 3 クラスと 2 クラスずつが置かれている。

プロジェクトチームは初め、保育施設を地域に解放し、地域センターの役割がもてるように、外に向けて解放することを目標に掲げた。しかし、最初の検討会議では、外への開放はまず内部での解放がなければ成功しないのではないかという意見が主流を占め、今回は保育所の内部をオープンにすること、すなわち保育内容の検討に重点を置くことに目標を定めた。具体的には年齢の異なる児童のクラスを作り、そのための教育計画の検討が行われた。

保育施設 7　ノルトライン－ウエストファーレン州　（旧西ドイツ）

保育所は新興住宅地にある。50 年代の古い住宅ともう少し新しい一戸建て住宅ともっと新しい賃貸しの高層住宅が混じり合っている。住民の構成は、およそ 3 分の 1 がトルコ国籍、3 分の 1 が移住者、3 分の 1 が土地の人となっている。鉱山の操業中止により失業

率が 14 パーセントに上昇した。保育施設は 1993 年 9 月に開所し、6 ヶ月から 14 歳までの児童 85 名が通園している。

プロジェクトチームと施設経営者の共通の目標は、児童の体験空間と生活空間が均衡がとれたものになるように保育内容を発展させることであった。まず子ども達はどんな理由で施設が楽しくないかを調べた。

- ドイツ語が話せない。理解できない。
- 家庭で保護されてきたために、保育所の騒音やいろいろな活動についていけない。 － 大きい集団の中で面食らっている。
- 現代は大人が多くのストレスを抱えているので、子どもたちは自分たちが受け入れられていると感じることができない。護られているという感情がもてない。
- 保育者も子ども達に過度の要求をして、家庭からの分離を克服して早く保育所に慣れるように圧力をかけている。
- 特に年長児は、施設に新しいものや珍しいものがないので不満に感じている。

プロジェクトが行われる以前のこの保育施設では保育者が多くのことを決定していて子ども達の参加があまりみられなかった。そのために子どもと共に保育所を運営していくという観点から保育のあり方を見直すことになった。

－子ども達が自分から進んで体験できるような機会を提供する。
－日常的に子どもの興味や要求や希望を優先させる。
－指導計画の実行より、子ども中心の保育を目指す。
－保育者は子どもの希望を知り、かれらの欲することを理解するように努める。

4. 出会いと交流の場としての保育施設

保育所が地域に開かれた場所として家族から支持されること、教会付属の保育所という意識から自分たちの保育所という意識に変わることを目指す。

取り組みの例

<u>保育施設　8　コープレンツ市　ラインラントーファアルツ州　（旧西ドイツ）</u>

1974 年、病院の看護婦の子ども（3 － 6 歳）のための企業保育所として出発した。

1975 － 77 年に学童を、1979 年からは 3 歳未満児を受け入れるようになった。現在はコープレンツ市のすべての地域の子どもたちを受け入れている。子ども達の多くは経済的に恵まれていない家庭の子どもたちである。保育時間は朝 5 時 45 分から 20 時 30 分までである。子どもは全体で 90 － 96 人で、縦割り年齢の 6 クラスに分かれている。各クラスは 3 歳未満児が約 5 人、3 － 6 歳児が約 6 人、学童が約 5 人の割合で構成されている。子どもの最年少は 9 ヶ月、最年長は 12 歳である。

プロジェクトでは、施設の状況を分析した結果、施設が孤立しているということが確認されたので、この保育所を内部に対しても外部に対してもより開放的なものとして、この場所を人々の出会いと交流の拠点とすることを目標に掲げた。さしあたり、親との関係を見直すことから始めた。

－親の生活状況と労働状況をもっと知る。
－保育所の活動をもっとよく親に分かってもらう。
－保育者同士のコミュニケーションと協力を改善する。
－保育者と子どもとのコミュニケーションを改善する。
－保育者と親のコミュニケーションを改善する。
－保育者と外部の者とのコミュニケーションを改善する。

－子どもと大人のコミュニケーションを改善する。
－親と他の大人との間、親と子どもとの間のコミュニケーションを改善する。
－業務計画はこれらの目標が達成できるような計画であること。

保育施設 9　ラインラント－ファルツ州（旧西ドイツ）

ランダウ市の郊外にある人口約 1200 人の小さい村である。新興地域のために比較的収入の高い若い家族が流入してきている。そこで新しい居住者と古くからの居住者の間のコミュニケーションが問題にされるようになった。保育所はここ一カ所しかないためにあらゆる階層の家庭の子どもがここに通ってきている。離婚率は高く、園児の 15 パーセントは一人親の家庭の子どもである。幼稚園年齢（3 ～ 6 歳）の児童のクラスが 2 クラスと学童のクラスが 1 クラスあり、幼児と学童のクラスは 2 つの建物に分かれている。プロジェクトが始まる前から幼児グループの建物は地域センターの役割を果たしてきた。特にこの地域に移ってきた若い家族の交流の場となっていた。また州のモデル事業としての、世代間の交流センターとしての活動も行っていた。今回のプロジェクトは、あらためて保育所を地域の出会いと交流の場所としてさらに発展させ、世代を超えて一緒に暮らす視点をより浸透させることを目標に掲げた。

これまではどちらかといえば施設を利用している親と家族のための活動に限定されていたが、この機会にそれ以外の人も含めてすべての住民に対象を広げることが提案された。例えば男性のための料理教室や女性のための自動車のタイヤのパンク修理の講習会やコーラスグループなどが催されて好評であった。とくに男性の料理教室では離婚して子育てをしている父親、定年退職後の男性、妻と死別した男性、若い独身男性などさまざまな立場の人が交流することにより、地域で暮らす者同士の連帯感が芽生え、やがてこの地域の政治や文化の問題についてもお互いの意見を交換するように発展した。また樹木の伐採についての講習会は、意図的に昼間、まだ子どもたちが施設に居る時間帯に、園庭を会場にして造園技術者を講師に招いて行われた。こうすることにより子どもと地域住民とが自然に触れあう機会ができた。

5.　地域におけるネットワークのパートナーとしての保育所

少子高齢化の時代に、保育所は世代間が交わり学びあう場でなければならない。また地域のさまざまな施設やグループとのネットワークにも貢献することが求められている。

取り組みの例

保育施設 10　ノルトライン－ウエストファーレン州（旧西ドイツ）

人口 35000 人の小都市の施設。教会の敷地内にあり教会に隣接している。同じ敷地内に簡単な塀で仕切られた高齢者のセンターがある。町には大企業が少なく、小企業が多い。どちらかというと中流の家庭で、両親がそろっていて、母親がパートタイムで就労していることが多い。保育所は 4 クラスで構成され、外国籍の児童は少ない。プロジェクトでは最初に保育内容を見直すことがテーマとして選択されたが、親の関心は学力重視の教育にあり、その傾向があまりに強かったので、テーマを変えて世代間の交流と地域のネットワークのよきパートナーとなることを目標にするように変更した。

保育施設 11　カッセル市、ヘッセン州　（旧西ドイツ）

カッセル市の東に位置し、社会的な問題を抱えている住民の多い地域である。失業者が多く、多くの親は近くのフォルクスワーゲン

自動車工場で働いている。その場合には両親共働きが多い。一人親の家庭も近年急増している。保育所は外国人や移民が居住するバラックに取り囲まれて建っている。　この保育所は22年前から存在している。75人の3～6歳児が3クラスに別れて保育されている。園児の半分は外国籍の児童である。プロジェクトの重点は、保育所が地域の住民の世代間の交流の場となることと、地域のさまざまな領域とのネットワークを促進させることに置かれることになった。

地域の施設とネットワークを組んで活動していくためには、ネットワークがお互いにとって有益でありしかもあまり大きい負担とならないことが大切である。この地域は教会を中心としていろいろな団体が活動をしている。保育所の他に高齢者団体、青少年団体、女性団体、家庭集会、聖歌隊、その他のグループがある。保育所と高齢者の団体との交流では保育所に高齢者が招待されて同じ活動を一緒に体験するということが計画された。予想されたより多くの高齢者が参加した。さらに平日でも保育所を自由に訪問しても良いということを提案したために、多くの高齢者が訪れて、保育者の負担が大きくなり、やり方をお年寄りを個別的に招待して活動に参加してもらうように変更しなければならなかった。青少年グループとの交流では、週末のミニキャンプを合同で行い好評であったった。女性団体との交流では、女性が保育所の保育に参加するようなプログラムをつくったが、参加した人の中には趣旨が十分に理解できていない人もいて、保育者が楽をするために外部からの手助けを求めているのではないかというような声が出て、あらためて話し合いの機会をもつこともあった。教会の牧師も毎週保育所を訪ねて子どもと交わるようになった。　その他にも近くの保育士養成の専門学校の学生たちが教師と共に訪れて、保育所の敷地内に自然の遊び場をつくってくれた。2年間という短い期間であったがさまざまな試みがなされ、すべてがうまくいったわけではないが地域に開かれた保育所の第一歩を踏み出すことができたというのがこの計画に参加した人々の共通した評価であった。

参考文献: Theresia Wunderlich, Frank Jansen (Hersg.), Katholische Kindergaerten auf Entwicklungskurs, Verband Katholischer Tageseinrichtungen fuer Kinder(KTK) -Bundesverband e.V. Freiburg,1997.